設楽発掘通信

No.3
平成２６年
８月１日号

万瀬（まんぜ）遺跡の地元説明会開催決定！

万瀬遺跡地元説明会のご案内

日　時　平成26年**8**月**9**日（土）午後2時～午後3時　雨天中止（小雨決行）
場　所　万瀬遺跡発掘調査現場（設楽町川向字マンゼ地内）
　　国道257号設楽大橋の北西約500m／おでかけ北設バス「川向公会堂前」バス停からすぐ
内　容　確認された遺構の見学および出土遺物の展示（調査員による説明を行います）
主　催　（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
その他　参加は無料です。現地は急傾斜地で足元が悪いので、動きやすい服装や履物でご参加ください。

問い合わせ先　愛知県埋蔵文化財センター調査課（担当：鈴木）鈴木携帯 **080-1571-4982**

六月から開始しました万瀬遺跡（川向所在）の発掘調査は順調に進み、多くの縄文土器が出土するなどの成果が得られています。このたび、八月九日に発掘調査の成果を現地見学する地元説明会を万瀬遺跡の調査現場にて開催することになりました。実際に縄文土器などが出土している様子を見ていただきたいと考えていますので、この機会にぜひご参加ください。

さて、調査の開始が遅れておりました西地・東地遺跡の発掘調査（本調査）ですが、ようやく七月中旬から調査が始まりました。今年度は四四二〇平方メートルを調査します。大きくA区・B区・C区の三つに分けて、B区から掘削作業を行います。初めに住宅の基礎構造などを取り除き、表土（近代以降の新しい堆積）を掘削して作業を進めています。日程はまだ分かりませんが、九月か十月頃には西地・東地遺跡の地元説明会を開催したいと考えていますので、ご参加頂ければ、幸いです。具体的な内容は次号以降でお知らせする予定です。

一方、発掘調査（本調査）と同時に行いました大名倉遺跡・上戸神遺跡・川向萩ノ平沢遺跡・大栗遺跡・永江沢遺跡の五遺跡の範囲確認調査も順調に進み、七月中旬に調査を全て終了いたしました。遺跡の範囲を推定する資料を得ることができ、来年度以降の発掘調査の計画に活かしていく予定です。

（愛知県埋蔵文化財センター　鈴木正貴）

平成二十六年度　範囲確認調査について

本年度の範囲確認調査は、川向の大栗遺跡・川向萩ノ平沢遺跡・上戸神遺跡、八橋の永江沢遺跡、大名倉の大名倉遺跡の順番に行ないました。

範囲確認調査の各遺跡では、概ね近世の遺物が出土しており、他にも川向萩ノ平沢遺跡では、縄文時代の打製石斧が一点、上戸神遺跡では、縄文時代晩期の土器片（写真1のトレンチ左側の黒色土から出てきました）が一点出土しております。写真2は川向萩ノ平沢遺跡での発掘風景です。

範囲確認調査は、遺跡の広がりや時代、遺構・遺物の有無を確認し、明らかにすることが第一の目的です。今回の調査では、遺物や遺構の出土量は比較的少ないですが遺跡の全体像を知るためには大切な作業です。この調査結果を踏まえたうえで、今後の本発掘調査の計画に活かしていく予定です。

（ナカシャクリエイテブ株式会社　樋田泰之）

縄文土器

写真１　トレンチ完掘状況（上戸神遺跡）

写真２　人力での掘削風景（川向萩ノ平沢遺跡）

打製石斧（表・裏）

万瀬遺跡の調査について

万瀬遺跡では、六月中旬から開始していた表土剥ぎ（遺跡に影響しない表面の土を取り除く作業）がほぼ完了しました。その結果、本来この場所は谷地形であったことが明らかとなりました。写真1は南東側から調査区を撮影したものですが、写真の中心部分に黒色をした筋のようなものが見えます。これが、谷の底部分で、北西（写真1奥）から南東（写真1手前）に向かって自然流路があったのでしょう。今のところ、調査区の南東側では遺物（昔の人が使っていた道具など）はほとんど見つかっていませんが、この谷底部分からの出土が期待されます。

調査区の北西端では、縄文時代の遺物包含層が残っており、土器や石器が出土しています。目立ったものとしては、打製石斧（石を打ち欠いて作った斧、写真2左）や、表面にススが付着した土器（写真2右）などが見つかっています。出土遺物の年代としては、土器の形・文様などから、縄文時代後期や晩期と言われる時代（今から三千四百～二千九百年前）だと考えています。

その他、江戸時代頃の田畑の耕作土からは、山茶碗（鎌倉時代～室町時代に愛知県や岐阜県で多く作られた庶民向けの食器。写真3右）や天目茶碗（鎌倉時代～室町時代に、瀬戸で焼かれた茶器。写真3左）なども見つかっています。これらの遺物は、八月九日（土）午後二時から、万瀬遺跡で行われる現地説明会で展示致しますので、ぜひ御覧ください。

（ナカシャクリエイテブ株式会社　廣瀬正嗣）

写真３　出土遺物写真（左：天目茶碗、右：山茶碗）

写真１　調査区全景（南東より）

写真４　発掘作業風景

写真２　出土遺物（左：打製石斧、右：縄文土器）

縄文土器の製作事情

縄文土器は、今から一万年以上前に出現し、約二千五百年前頃に弥生土器が出現するまでの間、日本列島の各地で作られた土器の総称です。縄文土器というと、縄目などの文様があったり、立体的な装飾があったりするものが注目されますが、実際には文様や装飾のないものも多数あります。土器は、時期や地域によって、作られ方に違いがあります。

そこで今回は、土器の表面がどのようになっているのか、という点に注目してみます。土器の表面には、さまざまな工具のあとが残っています。これを観察することによって、土器作りの終わりにどのような仕上げ方がなされたかが分かります。

下の写真は、現在調査している万瀬遺跡から出土した縄文土器片です。表面には、斜め方向に幅一センチ弱の浅い凹みがあり、その中に幾条かの筋も見えます。このような痕跡は、何を使って、どう動かすとできるのでしょうか。

これは、これまでの研究から、巻貝を横方向に引いた時にできるものであることが、分かっています。使われた巻貝は、ウミニナ類・フトヘナタリ・カワアイなどと推測されます。これらはいずれも海の干潟などに生息する貝類なのです。

東海西部地域では、縄文時代後期後葉から晩期前半にかけて（今から三千四百～二千九百年前）、土器作りの仕上げに巻貝が多用されています。海岸から遠く離れたこの設楽町内にあっても、奥三河郷土館所蔵の神谷沢遺跡出土資料を観察すると、巻貝による仕上げ方法が中心であったことが分かります。このように土器の仕上げ方だけをみても、その当時の人間が工具に貝を用いることに重きを置いた事もあり、山間部と海岸との関係も深かったことが分かるのです。

（愛知県埋蔵文化財センター　川添和暁）

万瀬遺跡出土縄文土器
（上写真は左写真の一部拡大）

土器の器面調整の復元実験（ウミニナを横に引いた状態）

設楽発掘通信 No.3
平成26年8月1日号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】 4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　ナカシャクリエイテブ 株式会社